

編集後記

編集長(ダン シロウ)

編集作業の愚痴は言い出せばきりが無い。まず、必ず原稿が遅れる人。必然的に言い訳メールもその人達から届く。そんなものより原稿を書けばいいのと思う。

早めに提出して、余裕があると思うのか読み直して、修正差し替え原稿を送ってくる人もある。締め切りに完成稿を下されば良いのに。受手がどんな手間と勘違い発生のリスク回避の手間を食らっているかが理解できていない。

自分のPCワードの作文設定にどんな制限が加わっているかの自覚のない人も少なくない。文字サイズ、フォントくらいは問題ないが、段落、タブ設定や行間設定が一般的になっていない人もある。貰ったテキストをこちらのフォーマットに流し込むと、どう操作すればいいのだと思案するような文面になる。

執筆者短信に図表、イラストを貰う方で、それが独立したデータになっておらず、何かの設定に紐付いているものがある。すると、他の人の文章を重ねてしまったり、位置の移動が難しかったりすることがある。

私はこんな作業に明るい人間ではないので、困っているだけで、今書いていることが正しいかどうかも分かっていない。

だから締め切りを守って、シンプルなワードテキストで、図、イラストは文中にはめ込まず、単独の別添データで送ってほしい。

それ以外の方は、PDF原稿で完成させたモノを締め切りにいただきたい。そうすると目次が完成したところで、ページナンバー入力依頼をお願いして、再送信して貰って完成になる。皆様、どうぞよろしく。

*

年に四回、十五年ほども続けてきている編集会議は、到着原稿チェック、未着のもの、各ページ数、休載の確認、時には手直しをお願いするものなど、いろんな情報を三人で共有する。

しかしそんな事務作業は片手間で、ここからはcoco 君の宅配カレーを食しながら、「今嘶」の交換で

ある。当然、私がくっちゃべっている事が多いが、78歳、53歳、47歳の現在交流会である。

今回は楽しく働くことと、それによって未来に向けて新たに生みだせているものはあるか？がテーマだった。

長寿化する社会で、働き続けるということは、今が自分の未来を充実してくれる仕事になっていなければならない。それは老後の蓄えの話などではなく、高齢になってゆく己の存在し甲斐だといってもいい仕事を作り出せているかという問題意識なのだ。

雇用先がそんなものを用意してくれることはないし、そんな義理もない。誰もが歳を重ね、早晚その場からは去るのである。

未来の自分の時間の流れの中に立っているのは自分。だからその時に向けて今、何を選択してしているか？そんな話になった。

編集員(チバ アキオ)

ナイキの躍進を描いた映画『AIR/エア』。その中ではナイキのスローガン「Just do it」にも触れている。この「Just Do It」(いいからやろう)とともに私が好きなセリフは「新しいチャレンジこそ、ナイキだろ！」。

先日は、映画『かくかくしかじか』を観に行った。以前、アート系に進んだ学生時代の同級生に薦められ、漫画は購入して読んでいた。いい作品である。作者、東村アキコさんとその師匠でもある日高先生のやり取りは、時に厳しく、ユーモアもあり、涙もある。こうした師匠に出会えたことがとても素晴らしいと思えてならない。劇中の「最近、かいてるか？」とか、繰り返される「いいから、かけ！」「かけ～！」というセリフは、とても心に来る。私も芸術大学に10年弱教えに行っていたことがある。4年間の学生時代に開花し、卒展などで大きく評価される人もいる。その一方でスランプに向き合う姿にも出会うことも同じくらいあった。意味、意図、ねらい、意義…は作品につきものである。その一方でそこにとらわれすぎるとかけない…ということも私ですらみることがあった。

対人援助学マガジンは「かけ！」という媒体である。実際に学会員ならだれでも書ける。そして60回以上書いた人が山ほどいる。人によっては、マガジンの存在自体が「かけ！」だろう。「かかないと下手になるからな…」大泉洋扮する先生は永野芽衣ちゃん演じる

主人公にいう。そして、オンライン無料マガジンを発行し続ける「新しいチャレンジこそ、ナイキ…じゃなくて、私たち対人援助学会だろ！」。

編集員(オオタニ タカシ)

対人援助学会第17回大会の大会事務局に加わることになりました。今年度は大阪キリスト教短期大学での開催で、大会長はマガジンにも執筆しておられる西川友理さんです。

実は昨年度は私の勤務校での開催で、その時にも事務局に入っていて、大会準備はそれなり大変でした。それもあって2年連続か…と若干尻込みしていたのですが、誘われたものには極力乗ることにしているので結局は参加することにしました。

どうせやるなら、面白く、活気のある大会になればと思います。ぜひ発表やワークショップの応募をお願いいたします。

今年から大学での役割が一つ増えました。これも誘われて乗ってしまった案件なのですが、全学科共有の自習スペースに週に1コマ分在席しておくというお役目で、これまで4年間では数えるほどしか行ったことがなかった部屋で仕事をしています。いつもと違う場所に身を置くと見える景色も違って、自分が知らないところで学生さんや教職員の方がさまざまに動いておられたことを知ります。

こういうのはやっぱり面白いですし、足を動かす方がよいなと改めて思います。とはいえ、新参者にできることはほとんどなく、今のところ自習スペース滞在中の私自身の仕事への集中力がとても高く、研究室にいるより数段仕事ははかどるのが、何よりの成果になっています。

対人援助学マガジン

通巻61号

第16巻 第1号

2025年06月15日発行

<http://humanservices.jp/>

■ご意見・ご感想■

マガジンに対するご意見ご感想は

danufufu@osk.3web.ne.jp

マガジン編集部

第62号は2025年09月15日

発刊の予定です。

原稿締切 **2025年08月25日!**

執筆希望者、常に募集

本誌は常に書き手に門戸を開いています。新たなジャンルからの、執筆者の登場に期待します。自身の生活スケジュールに本誌「連載」を持ち、継続的に、自分だからこそ描ける分野の記録を発信したいという方からのエントリーを待っています。ページ制限なしの連載誌です。必要な回数、心置きなく書いていただけます。ご希望の方、編集長まで執筆企画をお知らせ下さい。**執筆資格は学会員であること。**現在非会員で書いていただく事になった方には、本誌は学会ニュースレターの位置づけですので、対人援助学会への入会をお願いしています。

対人援助学会事務局

540-0021

大阪市中央区大手通2-4-1

リファレンス内

TEL&FAX学会専用 06-6910-0103

表紙の言葉

「家族理解の教科書 graphics」の中に、雑誌掲載はなく、書き下ろした一篇がある。

「安紀子の帰省」、その最終コマに近い場面である。子どもの頃に一度経験した性被害を一人で抱えて生きてきた主人公が、大学卒業時期の正月、家族にそれを打ち明ける物語。

どこにでも在ることではないが、それが家族に起きてしまう。「なぜ?!」と叫びたい者と、黙り込んでしまう者。どうすればいいのか戸惑うばかりの者。しかしそんないたたまれない時間も共有し、乗り越えようとする家族。

家は裁判所ではない。白黒のつかないことも、付けられないこともあるだろうが、グレーの中をも生きていくのが家族だ。

2025/6/15